

社会教育研究部門

## 「教育と公共」研究部会（第48回）

日時：2023年6月16日（金）13：30～16：00

場所：オンライン

出席：上野正道・狩野浩二・田嶋一・仲田康一・藤井佳世 各兼任研究員

山口和人所長・鈴木悦子・金沢千秋・川上智子（野間教育研究所事務局）

欠席：浅井幸子兼任研究員

内容：（1）狩野研究員：下記の2冊の本を資料に報告

- 『わたしの教育実践記録－持続する学び』（荻田泰則・著 一荃書房）について
  - ・荻田泰則は1975年に宮城教育大学に入学し、斎藤喜博の授業や演習を受け、小学校教師を目指す
  - ・1977年、「教育学演習」の斎藤喜博による「介入授業」を学ぶ。また体育（マット運動・跳び箱）や表現活動の指導を学ぶ
  - ・1979年、雄勝町立船越小学校に赴任。版画や描画の実践に取り組む。「ふるさとの歌」（島小の合唱曲）にも取り組む
  - ・1984-1990年、大和町立吉岡小学校で体育主任として表現活動を指導。オペレッタに取り組む。描画の実践を通して自己主張や集中力、観察力の向上をはかる
  - ・1990年、仙台市立中山小学校に異動。図工と体育を中心に子どもの心を開く実践に取り組む
  - ・1996年、高森東小学校に異動。研究主任として学校づくりの中核となる
  - ・2002年、片平丁小学校に異動。教務主任として日課表づくりに取り組む
  - ・2009年、折立小学校に異動。初任研修の指導講師として初任者を指導
  - ・2016年、「“斎藤喜博を中心とする授業映像”を見る会」を立ち上げる
  - ・2019年から教職大学院に入学
- 『東日本大震災と子どものミライ』（橋本恵司・著 春風社）について
  - ・橋本恵司は高校時代に斎藤喜博著『君の可能性』と出会い、宮城教育大学に進学。横須賀薫、日向康らに師事。田中正造などを研究
  - ・橋本は、荻田と同様「子どもの事実にもとづく子どもの変革」や「子どもと教師の接点に関する研究」で、斎藤喜博による教育実践・教育研究に取り組む
  - ・東日本大震災で被災し、橋本の自宅の資料は亡失したが、大学の研究室に保存されていた卒論をもとにこの本を執筆。被災した三つの学校が震災後、学校再開、閉校・統合していく経緯を記録としてまとめる

（2）上野研究員：「民主的シティズンシップと公共性への教育－デュイからピースタへー」として論文発表。内容は以下の通り

日本を含む先進諸国では、教育と政治に関する新たな関心が広がり、グローバル・シティズンシップ教育（GCED）が課題となっている。デューイとビースタの理論を取り上げて、民主的シティズンシップと公共性のための教育理論を考察し、その今日的意義と展望を明らかにする

1. デューイの民主主義と教育の思想

- ・アメリカの進歩主義教育とデューイ

2. ビースタの、「教えること」と「教育の擁護」

- ・教育の学習化を超えて：教育の「学習化」を批判し、「教育の言語を取り戻す」ことが必要とし、教育の「主体化」を強調
- ・教えることの再発見：進歩主義的な観点から「教えること」と「教授」を探る。応答責任は「自分を見つける瞬間」であり「唯一性を呼び出す瞬間」
- ・教育的な問いにこだわること：「よい教育への問い」の探求。学校と社会の関係を捉え直す。社会が学校に要求する過度な介入に対して、学校は教育に頑固にこだわり、責任ある応答を果たすこと。「社会に対して閉ざされているが、世界に対しては開かれている学校」が望ましい

3. 民主主義と公共性のための教育

- ・シティズンシップの主体化と無知な市民：ビースタの「シティズンシップ学習の主体化の構想」。よき市民となるためには、よき民主主義を必要とする
- ・デューイの民主主義と教育の再訪：デューイの「民主的教育」の限界を更新
- ・世界中心の教育——民主主義と公共性の問いへ：よい教育とは何であり、教育において何を大切にすべきなのか、学校と社会をどのようにつなぎ直すのか。教育に求められるのは、生徒に「世界のなかに成長した仕方存在したいという欲望、主体として存在することの欲望」を引き起こすことである

・次回研究会 7月14日（金）13：30～